

環境教育：大分県中津市・水辺に遊ぶ会

柳, 哲雄
九州大学応用力学研究所

<https://doi.org/10.15017/27068>

出版情報：九州大学応用力学研究所所報. 137, pp.179-181, 2009-09. Research Institute for Applied Mechanics, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

環境教育—大分県中津市・水辺に遊ぶ会

柳 哲雄*¹

(2009 年 7 月 9 日受理)

Environmental Education: Circle for Playing at Beach in Nakatsu City

Tetsuo YANAGI

E-mail of corresponding author: tyanagi@riam.kyushu-u.ac.jp

Abstract

Environmental education activities by the NPO of “Circle for Playing at Beach” in Nakatsu City are introduced.

Key words : *Environmental education, collaboration of fishermen and citizen*

1. はじめに

里海は「人手をかけることにより生物生産性と生物多様性が高くなった沿岸海域」(柳、2006)¹⁾なので、里海を創生・維持する主役は里海で直接的な生産活動を行う漁民である。

しかし、例えば瀬戸内海の場合、沿岸住民人口約 3000 万人に対して、漁民人口は約 3 万人と 0.1%でしかない。瀬戸内海を里海とするためには、99.9%の非漁民が瀬戸内海とどのような付き合いをすればよいのかという問題を避けて通ることはできない。

沿岸の非漁民が海と親しみ、海を大事に思って、里海概念の意義を理解して、里海創生活動に加わる第一歩は環境教育である。

大分県中津市に事務局を置く、NPO (Not-for-Profit Organization: 特定非営利活動法人)「水辺に遊ぶ会」は活発な干潟保全運動で広く知られている。本稿では「水辺に遊ぶ会」の成り立ちとその活動の現状を紹介する。

2. 会の成立

「水辺に遊ぶ会」は、自動車会社の中津進出に関連した中津港の重要港湾指定申請に伴い、大潮の干潮時には長さ 10km・沖合 3km に及ぶ干出部が出現する中津干潟(図 1)の中央部の航路が拡張され、

それに伴う周辺整備で大新田海岸の一部が埋め立てられ、干潟の生態系が危ないという危機感により、「日本野鳥の会」が活発に行っていた反対運動を背景に、地域の自然を見直そうとの目的で市民を中心に 1999 年 7 月に結成された。

会結成の中心となったのは、長野県生まれで、お茶の水女子大学で動物形態学・分類学(主に海岸無脊椎動物)を学び、ご主人(中学校の社会の教諭)の仕事の都合で、1991 年から中津に在住しているという足利由紀子氏である(足利、2006)²⁾。

「水辺に遊ぶ会」ではまず、子供達を集めて、1999 年 7 月に干潟自然観察会を行って、中津干潟にカブトガニの幼生が存在することを“発見”した。カブトガニは中津港航路浚渫の環境アセスメントに記載されていたが、重要視されていなかった。この干潟自然観察会はその後、2 ヶ月に一回の割合で続けられている。参加費は 200 円(高校生以下 100 円)である。特に毎年 1 回行う夏休み干潟観察会(中津市後援)には、毎回 200 名を越える参加者がある。

中津港の重要港湾指定そのものは 1999 年 11 月に認可されたが、1999 年の海岸法の改正に伴い、港湾建設整備には地元の意見を聞くことが義務づけられた。そこで、大分県では中津港重要港湾指定に伴い、中津港周辺の海岸環境整備に対する地元意見を聞くために、2000 年 4 月に中津港大新田地区環境整備懇談会(後に協議会と改称)を立ち上げた。この懇談会には「水辺に遊ぶ会」を初め、漁民や海岸に済

*1 九州大学応用力学研究所

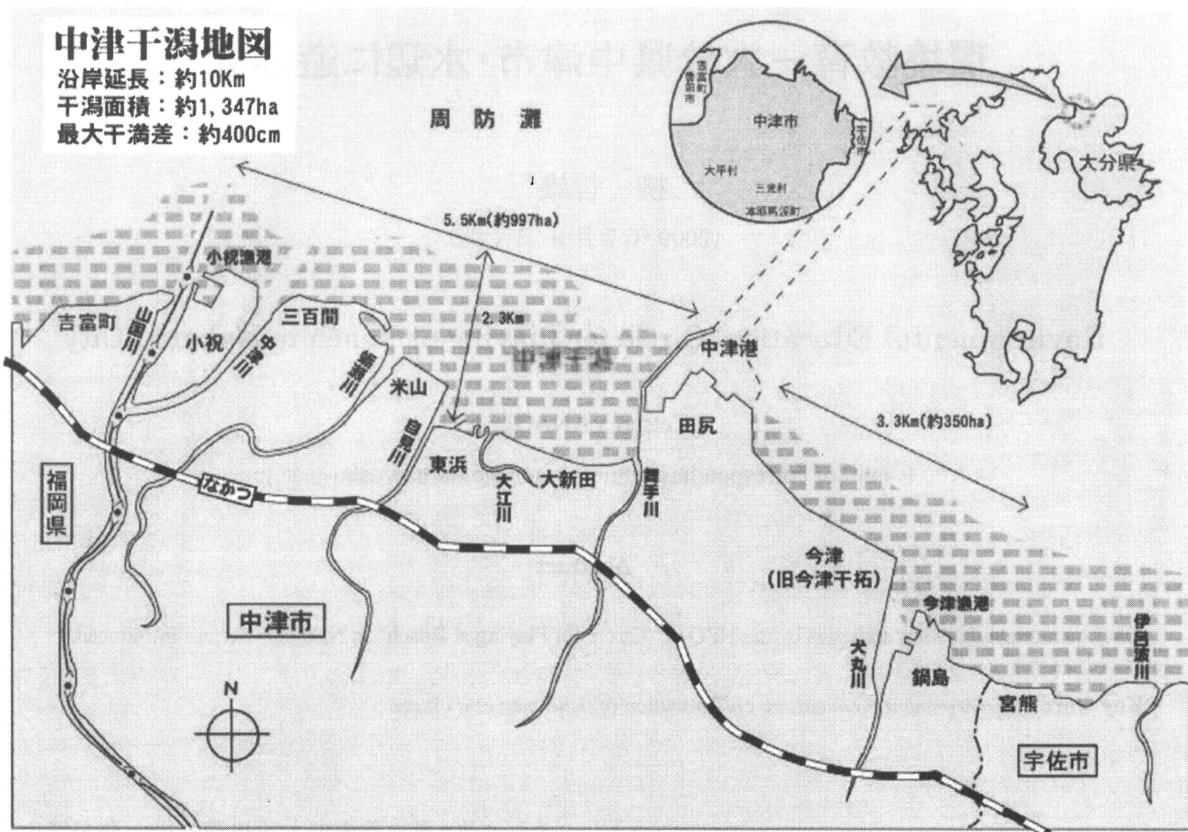


図1 中津干潟(水辺に遊ぶ会 HPより).

む地元住民など様々な人々がつどい、4-5回の議論の後、当初の港湾周辺整備計画は白紙撤回となった。さらに、様々な個別の問題を扱うために、分科会が開催された。詳細は後述する。

3. 会の事業

「水辺に遊ぶ会」では自然観察会の他、年4回、「楽しませてくれる海への感謝の気持ちをこめて」、海岸清掃と漂着物調査も行っている。漂着物調査は基本的には JEAN (Japan Environmental Action Network) の方法に従って、集めたゴミのリストを作成する。清掃には、毎回、地元の中学校、高校、短大、企業などから 100~300 名程度の参加がある。当初、集めたゴミは有料で市のゴミ処理場で処理されていたが、現在は中津市の協力によりその処理は無料化されている。この継続する海岸清掃活動の結果、海から流れ着くゴミの量は変わらないが、外部から海岸に持ち込まれるゴミの量は確実に減少傾向にあり、清掃活動を継続することが海岸ゴミの量の抑止に繋がることが明らかになりつつある。

また、調査研究も行っている。例えば、現在数人のメンバーで舞手川河口セットバック海岸(後述)前面の生態系変化モニタリングなどを行っている。

会による調査研究の基本は、最初に専門家に相談し、調査のやり方を決め、後は基本的には自分たちだけで調査研究を行い、まとめの段階で再び専門家に相談するという方法である。調査研究で得られた生物サンプルはすべて、後述するミュージアムで公開している。

さらに、海と浜の郷土史の調査研究も行われている。

このような調査研究活動への参加者からの声は、「水辺に遊ぶ会に行くと、外からいろんな先生が来て、新しい発見がいっぱいある。それを実践してみたり、人に伝えたりするのも楽しい」といったものである。ここでは新しい「市民の科学」が芽生えつつある。

さらに、理事長の足利氏は年間数十回程度の依頼講演をこなす他、大分県のみならず、福岡県も含めた数十カ所の豊前海沿岸の小・中学校で環境学習の講師も行っている。

「水辺に遊ぶ会」は地方自治体や国からの委託事業を受けることを可能にするために、2006年にNPO法人となった。

4. 建物のないミュージアム

「水辺に遊ぶ会」では、調査研究で得たサンプルなどの行き先がない(博物館などが近くにない)ので、2003

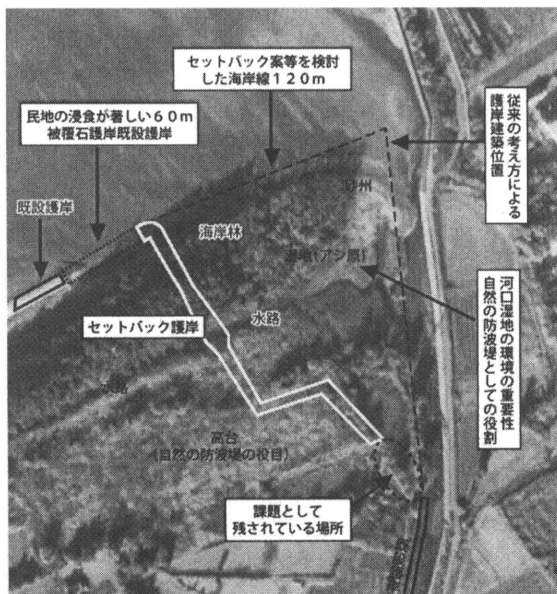


図2 中津干潟大新田海岸セトバック (清野, 2008 年より)³⁾

年にはサンプルの整理と情報発信を目的に、会のホームページ上に、建物のない博物館「水辺に遊ぶ MUSEUM」を立ち上げた、MUSEUM の資料は無料で貸し出しを行っている。この MUSEUM には、現在、年間 1 万件程度のアクセスが在る。HP の更新は、足利氏のご主人の役目とのことである。

5. 会の財政

「水辺に遊ぶ会」の年間予算は、現在、約 600 万円である。国や地方自治体からの委託費が約 200 万円、民間財団からの助成金が約 300 万円、年会費収入 (一人 1000 円) や寄付、支援金などが約 100 万円である。しかし、理事長を初め、監事などの給料は払われていない。足利氏は環境 NPO 法人の関係者がその事業できちんと食べられるようにならなければ、環境 NPO 法人による環境保全活動は長続きしないだろうと言われる。筆者も同感である。

6. 舞手川河口域保全

「水辺に遊ぶ会」による運動の大きな成果のひとつに舞手川河口高潮対策事業におけるセトバック護岸建設 (海岸堤防を陸に引いて (セトバックして) 建設する) がある。これは先述した懇談会の中で、大新田海岸東端で海岸浸食が激しい舞手川河口域の砂

浜の高潮対策をどう行うか、という話題から発展し、専門家も含めた検討が進み、2 年間をかけて地元を説得し事業化されたものである。200m の海岸線を保全するために、大分県が海岸の土地を買い上げ、海岸そのものは自然海岸として保全し、海岸線から内陸側に護岸を建設するというもので、2004 年に完成した (図 2、清野, 2008)³⁾。

その後、自然海岸の生態系変化モニタリング (大分県土木事務所から「水辺に遊ぶ会」に委託) が行われているが、カブトガニの産卵活動を初め、海岸の生態系はほぼ定常状態を保っているとのことである。

7. おわりに

「水辺に遊ぶ会」のモットーは「里海・里浜・豊葦原・中津國」というもので、海と人々が常に関わり続けることが、干潟の保全に最も重要であると考えている。

そのため、「たくさんの人に中津の海の豊かさや楽しさを知ってもらおう」として、漁民と協力して、子供達に蛸壺体験やノリ網体験などを行いつつある。また、山で切ってきた竹を使って、中津干潟での定置網漁業を復活させるという試みも行いつつある。さらに人と海の心の距離を短くするためにはどうすればよいか、という問題意識のもと、地産地消に向け、消費者との協働も試みつつある。

今後、瀬戸内海各地に「水辺に遊ぶ会」のような NPO 法人が立ち上げられることが期待される。

貴重なお話を頂いた NPO 法人「水辺に遊ぶ会」の足利由紀子理事長、「水辺に遊ぶ会」のサポーターで、図 2 を提供して頂いた東京大学の清野聡子博士に感謝する。

また本研究は、(独) 科学技術振興機構・社会技術研究開発事業「科学技術と社会の相互作用」による「海域環境再生 (里海創生) 社会システムの構築 (研究代表者: 柳 哲雄)」の一部であることを付記する。

参考文献

- 1) 柳 哲雄(2006)「里海論」. 恒星社厚生閣、96 頁.
- 2) 足利由紀子(2006)市民の視点で行う海岸保全事業. 河川, 2006.10, 46-51.
- 3) 清野聡子(2008)沿岸域の国土形成計画—変動する土地の尊重と活用に向けて—. 日本不動産学会誌, 22-1, 52-60.